

肝臓殊ニ其ノ含有脂肪體ノ形態學的研究(其ノ四)：
再ビ死産兒及初生兒ニ於ケル肝臓脂肪體ノ移動的關係ニ就テ(追加報告)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/31000

肝臟殊ニ其ノ含有脂肪體ノ形態學的研究(其ノ四)

再ビ死産兒及初生兒ニ於ケル肝臟脂肪體ノ

移動的關係ニ就テ(追加報告)

金澤醫科大學病理學教室(主任中村教授)

布瀨 七 一 郎

目次

第一章 檢査成績

第一節 死産兒肝臟脂肪體ノ形態學の檢査

第二節 初生兒肝臟脂肪體ノ形態學の檢査

第二章 總括及第一報告トノ比較

- (一)、肝細胞ニ就テ
- (二)、肝小葉ニ就テ

第三章

- (三)、細胞集團竈ニ就テ
 - (四)、死産兒及初生兒肝臟ニ於ケル脂肪體ノ形態學の差異
- 結論
文獻
附、表

余ハ曩ニ本研究第一報告⁽¹⁾ニ於テ死産兒、初生兒及哺乳兒ノ肝臟脂肪體ノ分布關係ニ就テ記載スル所アリシガ、尙多數例ニ就テ觀察スベキ必要ヲ認メ、其ノ後蒐集シ得タル材料ヲ以テ研究シ前報告ニ於テ記セシ所見ト比較對照スルノ機會ヲ得タレバ、此所ニ追加報告セント欲ス。

因ニ本材料ノ蒐集ニ當リテ、本學病理學教室及産科婦人科教室ノ外、東京帝國大學醫學部病理學教室及法醫學教室、京都帝國大學醫學部病理學教室、法醫學教室及産科婦人科教室、新潟醫科大學病理學教室及法醫學教室、千葉醫科大學病理學教室、慶應大學醫學部病理學教室及法醫學教室、愛知醫科大學病理學教室、岡山醫科大學病理學教室、法醫學教室及産科婦人科教室、大阪醫科大學病理學教室及法醫學教室、京都府立醫科大學病理學教室ヲ煩ハセリ、茲ニ各教室主任ノ御厚意ヲ深謝シ、尙各大學ヘノ出張ニ際シ多大ノ便宜ヲ賜ハ

リタル須藤學長ニ對シ深甚ノ謝意ヲ捧グ。

第一章 検査成績

第一節 死産兒肝臟脂肪體ノ形態學的檢索

研究材料ハ總テ十八例ニシテ、検査成績ノ大要ハ附表第一ニ示セルガ如シ。而シテ組織ノ固定、染色特ニ脂肪體ノ検査方式ハ第一報告ニ詳記シタル所ニ同ジ。以下凡テ之ニ準ズ。

所見概括

(一) 肝細胞

肥大型圓形ニシテ原形質ノ明徹ナル肝細胞ハ(以下單ニ之ヲ明徹細胞ト名ヅク)各例ニ於テ證明セラレ、就中第一、二、三、四、七、八、九、十二、十三、十六、十七、十八ノ各例ニ著明ナリ。又ニ核ヲ保有スル肝細胞モ可ナリ多數ニ現ハル。

(二) 肝小葉

小葉區劃ハ概シテ不明瞭ナリ、從ツテ中心靜脈ヲ中心トスル肝細胞索ノ放線狀配置ノ像ハ殆ンド認め難シ。

(三) 圓形細胞集團竈

實質内ニ散在スル大小圓形細胞ノ集團竈ハ可ナリ多數ニ認めラル、モ其ノ出現ノ程度一様ナラズ。亦同一ノ妊娠月數ノモノニ於テモ多少ノ差異アリ。

(四) 脂肪體ノ分布狀態

(イ) 中性脂肪(「ズダン」Ⅲ及「ニルブラウズルファート」染色陽性物質)

少數例ニ於テ多少量の差異ヲ見ルモ(第一、第五及第六例ニ於テハ他ノ例ニ比シ幾分少量)略一定シ、何レモ(十)量ヲ以テ現ハスコトヲ得。其ノ發現ノ部位ハ主トシテ肝細胞ナルモ、少數例(第五、第十五及第十七例等)ニ於テ Kupfer 氏星芒細胞内ニ極メテ僅カニ證明セラル、コトアリ。肝實質全體トシテ及肝細胞内ニ於ケル脂肪顆粒分布ノ狀態ハ概シテ瀰蔓性平等ナルモ、第二、第十、第十一、第十二、第十三、第十五、第十六及第十八例ニ於テハ肝靜脈系統靜脈周圍肝細胞内ニ多少濃厚ニ發現セリ。脂肪顆粒ノ大サハ概ネ中型及之

(1795)

型ナルモ、只第七例ニ於テハ稍大型ノモノヲ混ヘタリ。

(口) 「ノイトラルロート」染色陽性物質

「ノイトラルロート」ニ染色スル物質ノ稍多量ニ發現セルモノ四例、微量ノモノ三例、陰性ノモノ十一例ナリ。而シテ其ノ發現部位ハ主トシテ肝細胞内ナリ。

(ハ) 重屈折性物質

重屈折性物質ヲ六例(第四、第五、第九、第十五、第十七、第十八ノ各例)ヲ除ケル外全部ノ例ニ證明シタリ、其ノ發現部位ハ主トシテ Kupffer 氏星芒細胞内ニシテ、肝細胞内ニ證明スルコトハ稀ナリ。而シテ重屈折性ハ加温ニ依リテ一部消失スルモ大部分ノモノハ消失セズ。

(ニ) Fischer 氏法陽性物質

總テノ例ニ於テ證明セシモノナシ。

(ホ) Smith-Dietrich 氏法陽性物質

四例(第十一、第十五、第十六、第十八ノ各例)ヲ除ケル外全部ノ例ニ於テ證明セラレ、主トシテ肝細胞内ニ出現ス。

(ケ) Ciaccio 氏法陽性物質

只一例(第十例)ニ於テ陰性ナルモ、其ノ他ノ例ニ於テハ多少ニ拘ラズ證明セラレ、主トシテ肝細胞内ニ出現ス。

第二節 初生兒肝臟脂肪體ノ形態學的檢索

研究材料ハ總テ五十九例ニシテ、分娩後ノ生存期間ニ依リテ區別スレバ生後一日目三十七例、二日目十例、三日目三例、四日目五例、五日目二例、生後二週間ノモノ二例ナリ。而シテ臨床上診斷、解剖上診斷及檢査成績ノ大要ハ附表第二ニ示セルガ如シ。

所見概括

(一) 肝細胞

明微細胞ハ初生兒ニ於テモ屢認メラレ、全五十九例中十九例ニ於テハ可ナリ多數ニ出現スルヲ見タリ。而シテ其ノ内死因トシテ窒息

表 一 第

計	約二週間	約五日	約四日	約三日	約二日
一					三 (30%)
三五		一	二		七 (70%)
一八	二		一	一	
四		一	一	二	
一			一		
一七		一	三	一	七
二一	一			一	一
二〇	一	一	二	一	二
一九		二	二	二	七
三九	二		三	一	三

脂肪ノ微量ナルモノハ分布部位
 モトヨリ一定シ難キモ、稍多量
 ニ現ハル、モノニ於テモ Chisson
 氏囊周圍及肝靜脈系統靜脈周圍
 ニ限局シテ現ハル、コト多ク、
 然ラザル場合ニ於テモ實質内不
 規則限局性ニシテ、彌蔓性平等
 ニ分布スルガ如キハ殆ンド見當
 ラザル所ナリ。而シテ所謂小葉
 中間領域ニハ脂肪體甚ダ少ナキ

カ或ハ殆ンド之ヲ證明セズ、加之肝細胞内脂肪體配列狀態ニ於テ屢所謂“Periastular”ノ像ヲ呈スルモノアルハ其ノ特徴ニシテ、生後第
 二日ノモノニ殊ニ著シ。次ニ生後三日以上ニ於テハ脂肪體ノ出現度不規則ナルモ屢著シク大量ニ現ハレ、甚ダシキハ脂肪浸潤ノ狀ヲ呈
 スルモノアリ。而シテ實質内分布狀態ニ就テハ多クハ限局性ニシテ前述セル所ト大差ナク、亦肝細胞内配列ニ於テモ往々“Periastular”
 ノ像ヲ示スコトアリ。

(口)、「ノイトラルロート」染色陽性物質

陽性例七内四例ニ稍多ク證明セラル、モ、殘餘ノ三例ハ微量ナリ。發現部位ハ主トシテ肝細胞内ニシテ滴狀ヲナスモノ多シ。

(ハ)重屈折性物質

全五十九例中陰性ノモノ十八例、微量三十二例、稍多量ノモノ八例、可ナリ大量ノモノ一例ナリ。之ヲ生存日數ニ依リテ區分スレバ
 第二表ノ如シ。而シテ是等ノ重屈折性ハ加温ニ依リテ一部ハ消失スルモ、大部分ノモノハ何等變化ヲ蒙ムラズ。

(ニ) Fischer 氏法陽性物質

之ヲ證明スルコト甚ダ尠ナシ、只第十五例(生後第一日)ニ於テ僅カニ認めラル、ノミ。

(ホ) Smith-Dietrich 氏法陽性物質

全五十九例中陰性二十二例、微量十七例、稍多ク現ハル、モノ十九例、可ナリ大量ナルモノ一例ナリ。而シテ其ノ發現部位ハ肝細胞内最モ普通ニシテ、稀ニKopfer氏星芒細胞内ニモ見ラル、コトアリ(第五十二例ノ如キ)。今之ヲ生存期間ニ依リ區分スレバ第三表ノ如シ。

表 二 第

計	(卅)	(廿)	(十)	(士)	(-)	生存	
						出現 日數	標示
三七		一 (2.7%)	六 (16.2%)	二〇 (54.1%)	一〇 (27%)	約一日	
一〇			一 (10%)	四 (40%)	五 (50%)	約二日	
三				三		約三日	
五	一			二	二	約四日	
二				一	一	約五日	
二				二		週間	約二
五九	一	一	七	三二	一八	計	

表 三 第

計	(卅)	(廿)	(十)	(士)	(-)	生存	
						出現 期間	標示
三七			七 (1.9%)	二三 (35.1%)	一七 (45.9%)	約一日	
一〇			七 (70%)		三 (30%)	約二日	
三		一	一	一		約三日	
五	一		一	二	一	約四日	
二			一		一	約五日	
二			一	一		週間	約二
五九	一	一	一八	一七	二二	計	

〔、Diaceio氏法陽性物質

全五十九例中陽性僅カニ九例ニシテ内八例ハ生後第一日ノモノニシテ、其ノ發現部位ハ主トシテ肝細胞内ナリトス。

第二章 總括及第一報告トノ比較

(一)、肝細胞ニ就テ

第一報告前出ニ於テ記載シタル所謂明徹細胞ハ死産兒例ノ凡テニ於テ、亦初生兒例ニ於テモ急性死例(窒息死)ニ特ニ

著明ニ之ヲ證明スルヲ得タリ。余ハ第一及第三報告⁽²⁾ニ於テ之ガ本體ニ就テ聊カ述ブル所アリシガ、百枝⁽⁴⁾氏モ急性死肝臟ニ就テ余ト同一ノ所見ヲ記載シ、詳細ナル檢索ノ結果同細胞ハぐりこげーん高度ノ沈着、原形質内顆粒數ノ減少及其ノ容積ノ増大ニ依リテ發現セルモノトナセリ。急性死ノ場合ニ發現スル明徹細胞ト死産兒ノソレトハ果シテ同一ノ性狀ヲ有スルヤ否ヤハ疑問トスル所ナルモ、形態上ヨリ見ル時ハ殆ンド其ノ發生機轉ヲ同ジウスルモノナルガ如シ。死産兒及初生兒ニ於テ往々ニ核肝細胞ヲ見タリ。多核肝細胞ノ發現機轉ニ關シテハ今日尙諸學者ノ議論ノ一致ヲ見ザル所ナルモ、最近齋藤氏⁽⁶⁾ハ生理的、病理的、竝ニ實驗的方面ヨリ幾多ノ觀察ヲ試ミタル結果ニ核肝細胞ハ古人ノ云ヘルガ如キ *Milose* ニヨリ生ズルモノニ非ズトセリ。然レドモ余ハ近時⁽³⁾動物ノ肝臟ニ於テニ核肝細胞ノ存在ト同時ニ多數ノ間接核分割像ヲ實見シタレバ、ニ核細胞中亦間接核分割ニヨリテ生ズルモノアルヲ信ズルモノナリ。

(二)、肝小葉ニ就テ

死産兒ニ於テハ定型性肝小葉ノ像ハ殆ンド認メ難シ、初生兒ニシテ生後第一日乃至二日ノモノニハ其ノ一部分ニ於テ多少其ノ形態ヲ窺ハシムルモノアルモ尙不明瞭ノ部分多シ、然ルニ生後三日以上ノモノニ於テ漸次小葉區劃ヲ明示スルモノ多キヲ致スハ第一報告ニ於ケルト畧同様ナリ。

(三)、細胞集團竈ニ就テ

肝臟實質内ニ散在スル圓形細胞集團竈ハ胎生時造血竈ノ胎殘物ナルコトハ第一報告ニ於テ論ジタリ。本報告ノ檢査例ニ於テモ死産兒初生兒ヲ通ジテ之ガ存在ヲ證明シ、初生兒ニ於テハ概シテ生存期間ノ長キモノ程漸次減少シ、生後二週間ニ至レバ僅カニ其ノ痕跡ヲ認ムルニ過ギズ。而シテ圓形細胞集團竈ヲ形成スル細胞ニ大小二種アルコト及八ヶ月早産兒ニ於テ "*Lakunäre Korrosion*"⁷⁾ノ像ヲ認ムルコトハ第一報告ニ於テ述ベタル所ト大差ナシ。

(四)、死産兒及初生兒肝臟ニ於ケル脂肪體ノ形態學的差異

(イ)、中性脂肪

死産兒ニ於ケル中性脂肪發現ノ有様ヲ概括スレバ次ノ如シ。

一、量的ニハ中等量ニシテ概ネ一定セリ。然レドモ成熟兒ニ近キモノ程多少脂肪量増加スル傾向ヲ示セリ。二、小葉内實質全體トシテ及肝細胞内ニ於テハ概ネ普遍的ニ分布セリ。三、脂肪顆粒ハ中小型ヲ主トシ大型ノモノハ稀ナリ。次ニ初生兒ニ於ケル分布状態ヲ觀ルニ、

一、生後一日未滿ノモノニハ脂肪體含有量少ナキモノ大部分ヲ占メ、少數例ニ於テ稍多キモノアルモ分布状態ハ死産兒ト異ナリ何レモ限局性ナリ。又肝細胞内ノ配列状態ニ往々 *Perivaskulär* ノ像ヲ認メシムルモノアリ。二、生後二日ノモノニ於テハ脂肪量稍多キ例ニ富メルモ其ノ小葉内分布ハ限局性ニシテ、且肝細胞内配列ニ *Perivaskulär* ノ像ヲ呈スルコトハ最も著明ナリ。三、生後三日以上ノモノニ於テハ脂肪量ノ多寡甚ダ不規則トナリ、大量ナルモノニハ實質全汎ニ亘ル脂肪浸潤ノ状態ヲ呈シ、少量ノモノニハ頗ル微量ヲ含メルモノアリ。然レドモ尙往々ニシテ肝細胞内ニ *Perivaskulär* ノ配列ヲ示スモノアリ。四、*Kupfer* 氏星芒細胞内ニハ屢脂肪體ノ含有セラル、ヲ見ル。

以上多數例ニ於ケル脂肪體ノ所見ヲ以テ之ヲ第一報告ト比較考察スルニ、死産兒ニ於ケル脂肪體ノ量竝ニ分布ノ關係ハ殆ンド彼此相符合スルヲ認メ、初生兒ニ於テハ生後一乃至二日ノモノニ於テ脂肪量稍多キ例ヲ認ムルコトアルモ其ノ小葉内及肝細胞内分布關係ハ第一報告ニ於テ述ベタル鑑別要點ト畧一致スルモノナリ。脂肪量ノ點ニ於テ多少ノ差異ヲ見ルモ要スルニ死産兒ニ於テモ個性ニ依リテ量的差異ノアルハ事實ナレバ、生後各個性及周圍ノ狀況ニ依リテ其ノ差異ノ更ニ助長セラル、コトアルハ考ヘ得ベキ所ナリ。次ニ生後三日以上ノモノノ所見ニ於テハ前報告ト畧一致スルヲ認メ、其ノ間何等抵觸スル所アルヲ見ズ。

(口)、其ノ他ノ脂肪體

Fischer 氏法陽性物質ハ死産兒初生兒ヲ通ジテ僅カニ一陽性例ヲ認メタルノミニシテ、同物質ノ證明セラル、コト甚ダ少キハ前報告ト畧一致スル所ナリ。重屈折性物質ハ前報告ニ比シ陰性例稍多シ。 *Ciaccio* 及 *Smith-Dietrich* 氏法陽

表 四 第

檢 査 總 數	兒 別	
	死 産 兒	初 生 兒
一八	一七 (94.4%)	九 (15.3%)
五九	一四 (77.8%)	三七 (62.7%)

性ノ例ハ初生兒ニ於テ少ナク(死産兒ニ比シ)、殊ニ Ciaccio 氏法ニ於テ大差アルヲ示セリ(第四表参照)、第一報告ニ於テハ Ciaccio 氏法陽性物質ガ初生兒ニ於テ減少セルハ「リポイド物質中特ニ「ケファリン」屬ノ激減ヲ來セルニ基因スルモノト論ジタリシガ、本報告ノ成績ニ就テモ同一ノ結果ニ歸着スルハ否ムベカラズ。

第三章 結 論

(甲) 死産兒肝臟脂肪體ニ關シテ

一、中性脂肪分布状態ハ一汎ニ肝實質全體トシテ及肝細胞個々トシテ共ニ瀰蔓性平等ニシテ量的ニモ畧一定シ中等量ナリ。

二、Knipfer 氏星芒細胞ニ中性脂肪顆粒ヲ證明スルコト甚ダ稀ナリ。

三、Eiseler 氏法陽性物質ハ全ク證明セラレズ。

四、Smith-Dietrich 及 Ciaccio 氏法陽性物質ハ可ナリ多數ノ例ニ於テ證明セラル。

五、所謂明徹細胞ハ凡テノ例ニ於テ見出サル。

(乙) 初生兒肝臟脂肪體ニ關シテ

一、中性脂肪ノ分布状態ハ生存日數ニ依リテ差異アリ、生後二日以内ノモノニハ著シク少キヲ普通トス。亦含有セルモノニモ脂肪量左程多カラズ。其ノ小葉内分布關係ハ限局性ニシテ(Glisson 氏囊周圍及肝靜脈系統靜脈周圍肝細胞内ニ最モ濃厚ニ現ハル)。所謂小葉中間領域ニハ脂肪體極メテ少キカ或ハ全ク之ヲ證明セズ。亦肝細胞内配列状態ニ「Perivaskulär」ノ像ヲ呈スルハ初生兒例ノ特徴ニシテ、生後二日ノモノニ最モ著明ナリ。生後三日以後ニ於テハ脂肪

附表 第一

番 號	項 要	性	妊 娠 月 數	所 解 剖 上 見	脂 肪 體 檢 査						摘 要		
					III グ ラ ブ ラ フ ア ー ト ラ ロ ト	ニ ル ブ ラ フ ア ー ト ラ ロ ト	重 屈 折 氏 法	Fisch- Smith- Dietrich- 氏 法	Clare- Smith- Dietrich- 氏 法	Clare- Smith- Dietrich- 氏 法			
一	合	合	八		+	+	+	+	+	+	+	明徹細胞多數、小葉區劃不明瞭中等數、大小圓形細胞集團、毛細管狹小、二核肝細胞可ナリニ見ラル。	「ズゲン」田染色物質分布状態
二	合	合	九		+	+	+	+	+	+	+	明徹細胞多數、小葉區劃不明瞭多數ノ小圓形細胞集團及稀ニ大圓形細胞集團ヲ見ルニ核肝細胞可ナリニ見ラル。	略瀰漫性ニ分布ス、尙赤ノ大顆粒ヲ見ル。
三	早	早	九		+	+	+	+	+	+	+	明徹細胞多數、小葉區劃不明瞭、少數ノ小圓形細胞集團、二核肝細胞可ナリニ見ラル。	略瀰漫性ニ分布ス。
四	合	合	九		+	+	+	+	+	+	+	明徹細胞多數、小葉區劃不明瞭、中等數ノ小圓形細胞集團、二核肝細胞ヲ見ル。	同右
五	合	合	九		+	+	+	+	+	+	+	明徹細胞多數、小葉區劃不明瞭、中等數ノ小圓形細胞集團、二核肝細胞ヲ見ル。	同右
六	合	合	九		+	+	+	+	+	+	+	明徹細胞多數、小葉區劃不明瞭、中等數ノ小圓形細胞集團、二核肝細胞ヲ見ル。	同右
七	合	合	一〇	胃粘膜炎出血、舌外膜下出血	+	+	+	+	+	+	+	明徹細胞多數、小葉區劃不明瞭、中等數ノ小圓形細胞集團、二核肝細胞ヲ見ル。	同右
八	合	合	一〇		+	+	+	+	+	+	+	明徹細胞多數、小葉區劃不明瞭、中等數ノ小圓形細胞集團、二核肝細胞ヲ見ル。	略瀰漫性ニ分布ス。
九	早	早	一〇		+	+	+	+	+	+	+	明徹細胞多數、小葉區劃不明瞭、中等數ノ小圓形細胞集團、二核肝細胞ヲ見ル。	同右
一〇	合	合	一〇		+	+	+	+	+	+	+	明徹細胞多數、小葉區劃不明瞭、中等數ノ小圓形細胞集團、二核肝細胞ヲ見ル。	略瀰漫性ニ分布ス、毛細管狹小、二核肝細胞ヲ見ル。
一一	合	合	一〇		+	+	+	+	+	+	+	明徹細胞多數、小葉區劃不明瞭、中等數ノ小圓形細胞集團、二核肝細胞ヲ見ル。	同右
一二	合	合	一〇		+	+	+	+	+	+	+	明徹細胞多數、小葉區劃不明瞭、中等數ノ小圓形細胞集團、二核肝細胞ヲ見ル。	同右
一三	早	早	一〇		+	+	+	+	+	+	+	明徹細胞多數、小葉區劃不明瞭、中等數ノ小圓形細胞集團、二核肝細胞ヲ見ル。	同右
一四	合	合	一〇	硬腦膜出血、内臓鬱血	+	+	+	+	+	+	+	明徹細胞多數、小葉區劃不明瞭、中等數ノ小圓形細胞集團、二核肝細胞ヲ見ル。	略瀰漫性ニ分布ス。
一五	合	合	一〇		+	+	+	+	+	+	+	明徹細胞多數、小葉區劃不明瞭、中等數ノ小圓形細胞集團、二核肝細胞ヲ見ル。	略瀰漫性ニ分布ス。
一六	早	早	一〇		+	+	+	+	+	+	+	明徹細胞多數、小葉區劃不明瞭、中等數ノ小圓形細胞集團、二核肝細胞ヲ見ル。	同右
一七	合	合	一〇		+	+	+	+	+	+	+	明徹細胞多數、小葉區劃不明瞭、中等數ノ小圓形細胞集團、二核肝細胞ヲ見ル。	略瀰漫性ニ分布ス。
一八	早	早	一〇	心外膜下出血、肋膜下出血、胸腺益血	+	+	+	+	+	+	+	明徹細胞中等數、小葉區劃不明瞭、中等數ノ小圓形細胞集團、二核肝細胞ヲ見ル。	略瀰漫性ナルモ肝靜脈系靜脈周圍ニ多少濃厚ナリ。

量ノ多寡甚ダ不規則ニシテ大量ナルモノハ既ニ脂肪浸潤ノ像ヲ呈スルモノアリ。

二、Kupffer 氏星芒細胞内ニ屢脂肪顆粒ヲ證明シ、時トシテ普汎性大量ニ含有セラル、コトアリ。

三、Fischer 氏法陽性物質ヲ證明スルコト甚ダ稀ナリ。

四、Smith-Diebrich 及 Cincio 氏法ノ陽性例ハ全検査例ノ一五・三%ニ過ギズ(死産兒ニ於テハ九四・四%ノ陽性例アリ)。

五、所謂明徹細胞ハ出現スルコトアルモ窒息死例ニ著明ナルモノ多シ。

(丙) 斷 案

余ハ第一報告ト本追加報告トヲ通ジテ遂行シタル百五例(内死産兒二十八例、初生兒及哺乳兒七十七例)ノ検査成績ヲ總括考量シテ、死産兒及初生兒ノ肝臟ニ含有セラル、或ル種ノ脂肪體特ニ中性脂肪ノ量ノ差異竝ニ其ノ移動的關係ニ於テ兩者ノ間ニ發現スル可ナリ規則的ナル一ノ代謝上ノ定律ノ存スルヲ看取スルト共ニ、是等ノ要點ハ其ノ際ニ行ハル、脂肪體移動ノ可ナリ迅速ナルコト及脂肪體自個ノ性質ガ死後ト雖モ比較的安定ナルノ點ヨリ、法醫學上死産、生産鑑定上ノ參考資料トシテ役立つモノナルヲ信ズ。

文 獻

一、布瀬七一郎、死産兒、初生兒及哺乳兒ニ於ケル肝臟脂肪體ノ移動的關係竝ニ其ノ法醫學的意義ニ就テ、十全會雜誌、第卅二卷、第一號、(昭和二年一月)一頁。

二、布瀬七一郎、急性死ノ際ニ於ケル肝臟脂肪體ニ就テ附急性死ノ肝臟組織像ニ對スル一ニノ知見、十全會雜誌、第卅二卷、第五號、(昭和二年五月)一頁。

三、布瀬七一郎、「ラノリン」飼養家兔ニ於ケル肝臟及脾臟脂肪體ノ分布關係、十全會雜誌、第卅二卷、第九號、(昭和二年九月)一頁。

四、百枝茂、健康肝ノ組織的構造ニ就テ、日本病理學會誌、第十六年、(大正十五年)三七頁。

五、齋藤節、多核肝細胞ノ意義、日本病理學會誌、第十五卷、(大正十五年)、二四九頁。

原 著 布瀬 肝臟殊ニ其ノ含有脂肪體ノ形態學的研究(其ノ四)